

第2回石狩市総合戦略推進懇話会開催結果報告書

平成28年11月18日

【日時】 平成28年10月2日（日）9：30～17：00

【場所】 現地視察（厚田区・浜益区）

ワークショップ（石狩市役所4階401・402会議室）

【出席者】 11名（16名中）

役職	氏名	出欠	役職	氏名	出欠	役職	氏名	出欠
会長	角川 幸治	×	委員	佐藤 勝彦	×	委員	原 俊彦	○
副会長	竹口 尊	×	委員	白井 かの子	○	委員	松崎 英樹	○
委員	木村 秀裕	×	委員	高梨 朝靖	○	委員	向田 久美	○
委員	河野 明美	○	委員	徳光 康宏	○	委員	山本 秀俊	○
委員	小林 卓也	○	委員	芳賀 武士	○			
委員	酒井 志津子	○	委員	林 美香子	×			

※正副会長を除き、あいうえお順

□オブザーバー 北海道石狩振興局地域創生部：田辺部長、高田地域政策課主査

□事務局 石狩市企画経済部：小鷹企画経済部長、本間企画課長、

池内企画担当主査、門井企画担当主任、橋本企画担当主任

【傍聴者】 2名

＝＝＝＝＝ 会議内容の記録 ＝＝＝＝＝＝

- 第2回石狩市総合戦略推進懇話会は、地域資源を発掘し、見つめ直し、その魅力を再認識するとともに、協働による地域資源の活用アイデアを検討することを目的に開催した「石狩市まちづくり市民会議」と共同でフィールドワークやワークショップを実施したため、本懇話会の報告書（内容の記録）については、「石狩市まちづくり市民会議報告書」とする。

石狩市 まちづくり市民会議

平成 28 年 10 月 2 日（日）開催

報告書



目 次

1	石狩市まちづくり市民会議開催の目的	1
2	開催概要	1
3	フィールドワークの実施状況	2
4	講演結果	3
5	ワークショップの結果	10

1 石狩市まちづくり市民会議開催の目的

- 「30年後の『まちの持続』」（総合計画及び総合戦略のミッション）の実現に向けて、地域の特色や資源を活かしたまちづくりを市民と協働で推進する。
- 市民が地域資源を発掘し、見つめ直し、その魅力を再認識するとともに、協働による地域資源の活用アイデアを出してもらう。
- 市民会議を通じて、市民のまちづくりへの意識を高め、自らの行動のきっかけとなるようにする。

2 開催概要

- <開催日時> 平成28年10月2日（日）9：30～17：00
- <場 所> 石狩市役所4階401・402会議室
- <参加者数> 28名
- <プログラム>

1. 開会
2. フィールドワーク（厚田区・浜益区の現地視察）
3. 主催者挨拶
4. 講演 「石狩市が目指すこれからのまちづくり」について
「まちづくりの進め方（協働の実践）」について
5. ワークショップ、発表、講評
6. 閉会

<開催状況>



3 フィールドワークの実施状況

フィールドワークでは、厚田区及び浜益区の施設や資源を中心にバスで移動しながら現地の視察を行った。

視察場所	備考
あつた港朝市	※朝市会場を自由に見学
厚田道の駅建設予定地	※恋人の聖地まで徒歩で移動し、道の駅予定地周辺を見学
恋人の聖地	
浜益温泉	※館内及び温泉周辺を自由に見学
はまます郷土資料館	※ガイドボランティアによる解説



▲あつた港朝市



▲恋人の聖地からの眺め



▲浜益温泉



▲はまます郷土資料館

4 講演結果

(1) 講演「石狩市が目指すこれからのまちづくり」

北海道大学公共政策大学院研究員

株式会社富士通総研経済研究所主任研究員

蛸子 准吏 氏



■講演内容（概要）

○そもそも計画とは

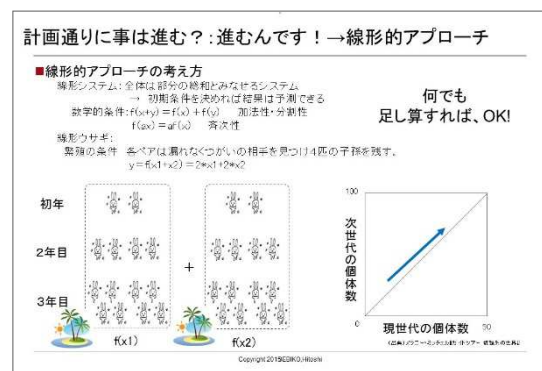
- ・計画（辞書）…将来実現しようとする目標と、この目標に到達するための主要な手段や段階とを組み合わせたもの。目標があり、たくさんの手段がある中で、それらを組み合わせること。
- ・総合計画が最上位にあり、その下に都市計画などの各種個別計画がある。
- ・受け身のものに捉えがちだが、誰が誰のために、誰が実現するのか、を意識すべき。

○総合計画とは

- ・2011年までは、地方自治法で総合計画をつくることが定められており、半ば強制的・受け身的につくるものだった。
- ・しかし、2011年に地方自治法が改訂され、自分たちの考えを実現するために、つくるかつくらないかも含めて決定することになった。
- ・石狩市としてもつくらないという選択肢もあったが、今回つくった。
- ・総合計画の構成は、ピラミッド型になっており、基本構想（目標）を10年ほどかけて考え、それに基づき、基本構想を実現する手段となる基本計画（施策）をたて、最後に実施計画をつくる、という段階をふむ。
- ・今回の石狩市は、ピラミッド型の構成通りにはつくらないことをあえて決めている。その代わりに、取り組みのプロセスのサイクルで上手く循環をつくろうということを考えている。

○線形的アプローチと非線形的アプローチ

- ・線形的アプローチとは、直線的に、物事を足し算すれば全体がつかれるという考え方。
- ・例：線形ウサギ。2匹のウサギから4匹のウサギが生まれるとすると、3年目には8匹になり、それがずっと続いていくと



いう考え方。

- ・ 5 年、10 年先の将来が予想できる概念で、これまでの総合計画は、人口が増え続けると思われていたため、線形的アプローチのまちづくりが行われていた。
- ・ しかし、現在の環境は思い通りにいかない、単純に計画通り進まないことが指摘されているため、足し算には限界があり、バランスを考えていかなければならない。
- ・ 例：非線形ウサギ。1 つの島に 10 匹のウサギを置いた時に 11 匹にウサギが増えたとしても、20 匹に増やしたら餌が足りなくなって必ずしも 22 匹に増えるわけではない、という考え方。
- ・ これまでのバランスは、経済成長で丸め込んでバランスをとっていた。しかし、バランスを意識しなくては持続しない時代になってくる。
- ・ サイクル・循環をどのようにつくっていくかが重要となっている。

計画通りに事は進む？：そんな簡単じゃない！→非線形的アプローチ

■非線形的アプローチの考え方

非線形システム：全体が部分の相加と異なるシステム
→ 初期条件の細かい差異が大きな影響を及ぼす

足し算には、
限界があります...

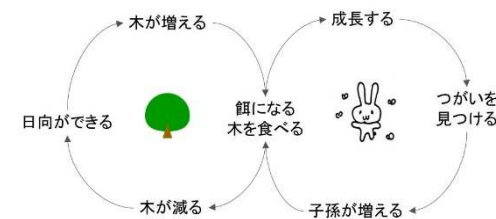
非線形ウサギ
繁殖の条件

各ペアは産むべくつがいの子孫を見つけた4匹の子孫を残すが、
子孫の何匹かは過剰な個体数が原因で自然に死滅する
(母子・誕生率:2 死亡率:0.4 最大持養能力:32)
ロジスティック写像: $x_{n+1}=rx_n(1-x_n)$ ※Rは係数



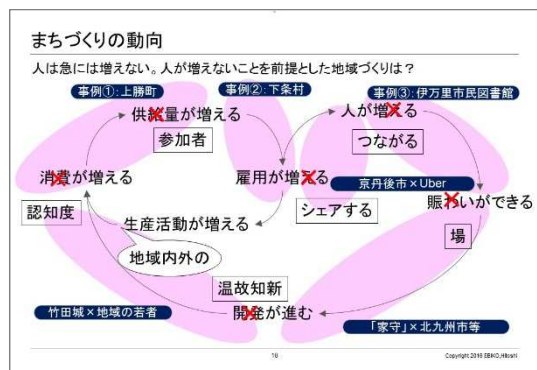
隠れた前提

ウサギと木の世代交代のバランスが取れる範囲でしかウサギは増えない



○高度成長期のまちづくり

- ・ 基本的には経済を中心に考えられていて、“消費”を増やすことが大事。
- ・ 消費が増えると、供給が増え、供給を増やすことで雇用が増え、生産活動が増え、消費が増える、という好循環をつくっていくということが前提になる。
- ・ しかし、現在は、前提となっている人が増えないために、まちづくりは厳しくなっている。
- ・ 人が増えない中で、成功している地域は何をしているのか？



○事例①：徳島県上勝町

- ・ 高齢化率 50% の超過疎地域。しかし街の雰囲気が決して暗いということはない。
- ・ 高齢者が“副業”で、つまものとして使用される葉っぱや草花を栽培出荷している。
- ・ 全国シェア約 8 割。
- ・ “副業”であるにもかかわらず、年収平均 300 万円、多くて一千万円を超える。

- ・どこにでもある葉っぱだが、どこよりも早く“つながり”を構築し、成功した。
- ・需要と供給のマッチングシステムを導入。インターネットが出来る前に取り入れ、J Aと株式会社いんどりと共同。全国からの需要を聞き（つまものの消費は多くはないが）、少量だが適切なものを供給していた。
- ・需要者の情報（どの時期にどんなものを必要としているか）を蓄積する。
- ・早い者勝ちで、早朝、情報を仕入れて、自宅の裏庭で栽培している植物を農協に持ち込む。
- ・需要と供給を結びつける仕組みをつくったところがポイント。

○事例②下條村

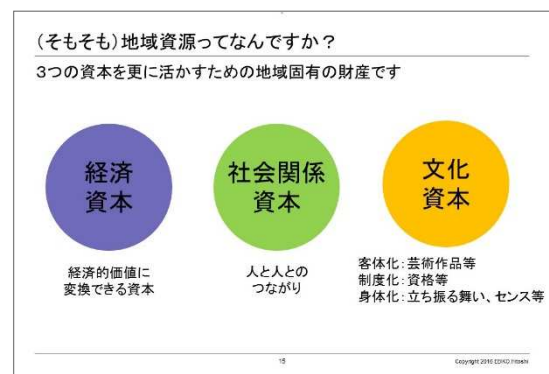
- ・過疎地域。高齢化率をとどめた。人口4千人を切っている。出生率が高い。若者を呼び込んでいる地域。
- ・主になっている「資材支給事業」は、村民がつくっている。
- ・実質公債比率は全国3位、黒字。売上は若者を呼び込むためのお金に充てている。

○事例③佐賀県伊万里市民図書館

- ・中庭があったり、将棋をしていたり、洞窟のような空間があったり、和室があったり、いろいろな機能や空間のある、注目されている滞在型図書館で、市民がつくったもの。
- ・86年に古い図書館の設備などが良くないということで、「図書館づくりを進める会」が発足した。
- ・普通であれば、要綱や予算をつくり終わると市民の参加は終わるはずだが、この地域では、建築の仕様をどうするか、ということにも市民が介入している。
- ・また、「サポーター」が存在し、古本を売って、収入は図書館に寄付している。
- ・本を読むだけでなく、モノをつくる場としても機能している。
- ・建物の設計も、子どもの背丈にあわせたり、高齢者が疲れないスペースを設けたりと考えられているが、それらも全て市民の意向である。
- ・展示も毎週テーマを変え、工夫された展示がなされている。
- ・繋がる場所としての「ヤングコーナー」は、中高生が何かメッセージを貼り出し、情報を得るために図書館に来る市民を増やしている。

○地域資源とは

- ・地域資源とは、3つの資本を活かすための地域の財産のこと。3つの資本とは、経済資本（経済的価値に変換できる資本）、社会関係資本（人と人とのつながり）、文化資本（特に立ち振る舞いやセンス）のこと。



- ・事例①葉っぱビジネスは、欲しがっている人とつながりをつくるということに価値があり、循環できた例。
- ・事例②下條村は、自分たちで何とかしようという気持ちと人とのつながりがある中で、無かったもの（経済資本）をつくり出そうとした例。
- ・事例③伊万里図書館は、文化資本をつくり、また、そこを通じて社会関係資本をつくっている例。

○事例：ミルピス

- ・利尻の 200ml の牛乳瓶に入っている 1 本 450 円の飲料。製造者は個人名（個人センスでつくられている）。
- ・商品の魅力だけではなく、社会関係資本と結びつくことによって、売れている。

○思考法／発散と収束

- ・収束とは、ロジカルシンキングともいわれ、正解を見つけようと論理的に考えること。
- ・発散とは、クリエイティブシンキングともいわれ、ミルピスのように、クリエイティブに考えの幅を広げること。
- ・今日はアイデアを出す場なので、くだらないことも含めて色々と意見を出して頂きたい。

(2) 講演「まちづくりの進め方（協働の実践）」

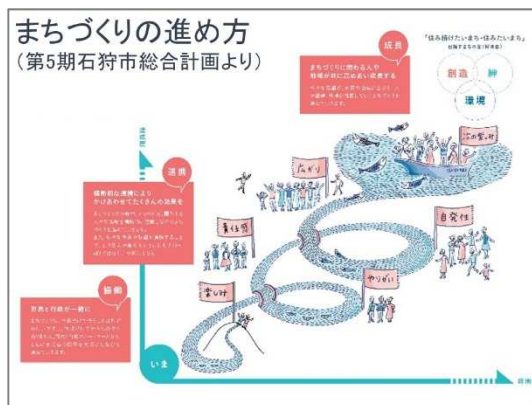
株式会社 KITABA 内匠 庸介 氏

■講演内容（概要）

【協働のまちづくり】

○石狩市のまちづくり（第5期石狩市総合計画）

- ・第5期石狩市総合計画では、30年後のまちの持続をミッションとして、住み続けたいと思うまちであり続けることを目指している。
- ・その進め方として、市民のまちづくりへの参加から楽しみや生きがいを感じてもらいながら、広がっていくイメージを示しており、協働・連携・成長が重要となっている。



○これからのまちづくり

- ・この背景を踏まえて、本日のテーマ「厚田区浜益区の地域資源の活用」を考えていく。地域資源の活用を考える際に、総合計画を踏まえて、つなげる・かけあわせる視点が重要となる。
- ・例えば、モノで例えると、電話はかつて通話のみの携帯電話だったものが、メール機能などが付加され、近年では、通話やメール機能のほか、カメラやインターネットなどの機能がかけ合わさっており、機能が複合的になっている。
- ・また、商店街では、かつては精肉や野菜などの専門店舗が集積して商業機能を形成してきたが、ショッピングセンターなどのアミューズメントなども融合してきている。そして、近年では、生鮮販売に加え、配達サービスや安否確認、憩いなどの機能やサービスの複合が進んでいる。
- ・まちにおいても、近年ではコンパクトシティといわれるように、職・住・商業・憩い・公共がコンパクトになり、様々な機能の複合化がされている。
- ・このように、人口減少・少子高齢化におけるまちづくりでは、一つではなく複数



の機能などをつなげたり、かけあわせたりすることが求められている。

【ワークショップの進め方】

○本日のテーマ

- ・本日のテーマは、「厚田区・浜益区の地域資源の活用」です。
- ・現地で見えてきたことを踏まえて、意見交換をしていきます。
- ・意見交換では、つなげる・かけあわせるということを意識して、たくさんアイデアを出していただきたい。
- ・第5期総合計画において戦略目標のなかでもあるように、資源をつながながら新しい価値、魅力をつくっていく、また、市民の誇りや自慢につながるアイデアを出していきます。

つなげる・かけあわせる

- つなげて新しい価値を
- 市民の誇りや自慢に
- 暮らしを魅力的に



○ワークショップ STEP1

- ・グループでの意見交換では、まず、現地を見て感じたまちの宝（地域資源）を出しあっていきます。
- ・現地で見たもの、感じたことや、本日現地で見えてきた地域資源のほか、日頃から思っている大切にしたい資源、自分ごととして好きな資源などをたくさん出してもらう。

STEP1

現地を見て感じたまちの宝（地域資源）を出しあいましょう

- ・現地で見たもの、感じたこと
- ・日頃から思っている大切にしたい資源
- ・自分が好きな資源

○ワークショップ STEP2

- ・次のステップとして、それらの地域資源を、つなげる・かけあわせるという視点で、どのように活用していくのか、どのように魅力を高めていくのかなどのアイデアを出していく。
- ・例えば、それぞれの地域資源の魅力や背景について物語等をつなげてストーリーとしてつなげたり、地域資源を活用するための方法・やることをつなげる、さらには、地域資源を活用した協働のプロセスやサイクルにあわせてつなげるなどが考えられる。

STEP2

まちの宝を活用するアイデア（つなげ方）を考えましょう

- ・お宝の魅力をさらに高めるためには
- ・かけあわせることで、より魅力的にするには

○ワークショップでの約束事

- ・グループでの意見交換では、たくさんの人に多くの意見アイデアを出してもらいたいので約束事がある。
- ・「自分ごととして、自分を主語にして意見を出しましょう。」「話は短めにしましょう。話しすぎは注意。」「意見は互いに違って当たり前。人の意見を否定しないようにしましょう。」「人の意見を受けて話をつなげながら、対話を楽しみましょう」、これらの約束事を意識して話し合いを行っていく。

約束ごと

- 自分ごと(自分を主語に)
- 話は短めに(話しすぎ注意)
- 違って当たり前(否定しない)
- 話をつなげる(話を楽しむ)

5 ワークショップの結果

参加者は、くじ引きにより5つのグループに分かれて、「厚田区・浜益区の地域資源の活用」をテーマとして、フィールドワークで見て感じたまちの宝（地域資源）を確認しながら、それらを活用するアイデアについて意見交換を行った。

意見交換の後には、グループごとに発表を行い、全体で共有するとともに、講師より講評をいただいた。



たまねぎグループ



【まちのお宝・地域資源】

○海・港

- ・厚田の港は石狩に近く、清潔である。
- ・海に落ちる夕日。

○浜・アクティビティ

- ・サーフィンのできる海や浜がある。
- ・シーカヤックをやっている人は、知っている。サーフィンをやっている人が多い。

○歴史遺産

- ・マッサン時代の歴史がここにもある。
- ・鯨番屋をもっと PR すべきである。

○温泉

- ・浜益の温泉は源泉かけ流し。オロロンライン沿い。

○自然

- ・雪も資源。
- ・自然の魅力。
- ・登山、釣り、サーフィンなどができる自然環境。

○人が住む生業の風景

- ・人の住んでいる風景、生業の風景が魅力。
- ・花畔の「農住団地」。農ある風景の中で暮らす。
- ・犬の散歩やランニングを外から来た人がやっている。

○食

- ・食べ物がおいしい。
- ・お米や飯寿司もおいしい。

○人と人とのつながり

- ・魚や野菜など、ほとんどの食材はもらえる。
- ・人と人のつながり。人（田舎の人）が良い。人懐っこい。

【地域資源の活用の方角性】

○観光客や定住者の考え方

○観光客を呼ぶ？あえて呼ばない？

- ・ITなどをうまく使って、若者に厚田・浜益の魅力を発信して定住につなげる。
- ・人を呼ばないというのもある。
- ・人が来すぎても困る。大渋滞に。
- ・グリーンツーリズムでの受け入れ。
- ・観光客ではなく、定住者を呼びたい。

○定住

- ・外から呼ぶより、外に出す。
- 暮らしている人が一番豊か
 - ・住んでいる人が一番お得で豊かだ。
 - ・登山、釣り、サーフィンなど自然を生かしたアクティビティをやるきっかけがない。
- 冬の厳しい暮らし
 - ・冬は花川地区の空き家に集まって住む。

【地域資源の活用アイデア】

- 厚田・浜益のライフスタイルをブランド化
- ITをうまく活用する
 - ・子育て世帯にも来てほしい。
 - ・感性の高い芸術家などに来てもらう。
- 厚田・浜益暮らしの成功者を増やす
 - ・田舎暮らしのニーズは高い。
- ちょっと暮らし+発信してもらう
 - ・実際に住んでいる人が発信することで魅力が伝わる。
 - ・外から来た人がそういう発信をしている。
- 子どもの成長のための生活環境を活かす
 - ・自然や田舎暮らしの体験を子どものころから体験させる。



【まちの資源と活用のアイデア】

■厚田地区

- ゲストハウスなど宿泊施設をつくる
 - ・民泊、ゲストハウス。ネットで環境はある。可能性はある。
 - ・スキー場のレストハウスを宿泊施設に。夏場の拠点に。
- 恋人の聖地
 - ・若い世代をターゲットにしたアクティビティをつくる。
 - ・子ども向け、大人向けのアクティビティ。
 - ・スノーモービル、ワイヤーなど。
 - ・滞在型で婚活する。
- 道の駅
 - ・冬は使えないので、どうするかが課題。年間通して活用したい。
 - ・6次化など。そば打ち体験。
- 厚田キャンプ場
 - ・厚田キャンプ場はマウンテンバイクで利用してもらおうようにする。
- 海水浴
 - ・BBQをできるように。
 - ・海浜プールはBBQはできるが、宿泊はできない。
- 体験から定住を増やす
 - ・冬を体験してもらうプログラム。
 - ・石狩のそばをもっとアピールする。
 - ・厚田でそばを使って健康づくりなどもできるのではないかな。
- 定住の視点
 - ・リノベーションをやる事業者を呼び込んでいく。
 - ・若い世代には少しオシャレ感が必要。
 - ・住んでもらう人を増やすことも大事（定住）。
 - ・そのために、まず体験型。
 - ・職もPRする。
- 事業者・アーティストを呼ぶ

■浜益地区

- 現状
 - ・浜益郷土資料館。
 - ・浜益は高齢化が進んでいる。人口1,300人。
 - ・人口をいかに増やしていくかを考えていった方が良い。
- ジビエで売り出す
 - ・ジビエでまちを売り出す。

- ・果樹園は小川があり釣りもできる。リフレッシュに最高。
- ・浜益の通りをもっと活用したい。冬が課題。
- ・バスでリピーターが多く来ている。
- ・牛の放牧跡に鹿を囲って鹿牧場にしてはどうか。
- ・鹿肉として活用してはどうか。ジビエ料理のレストラン。
- ・雇用も生まれる。
- ・血抜きの技術が重要。
- ・売れるシステムをつくる。

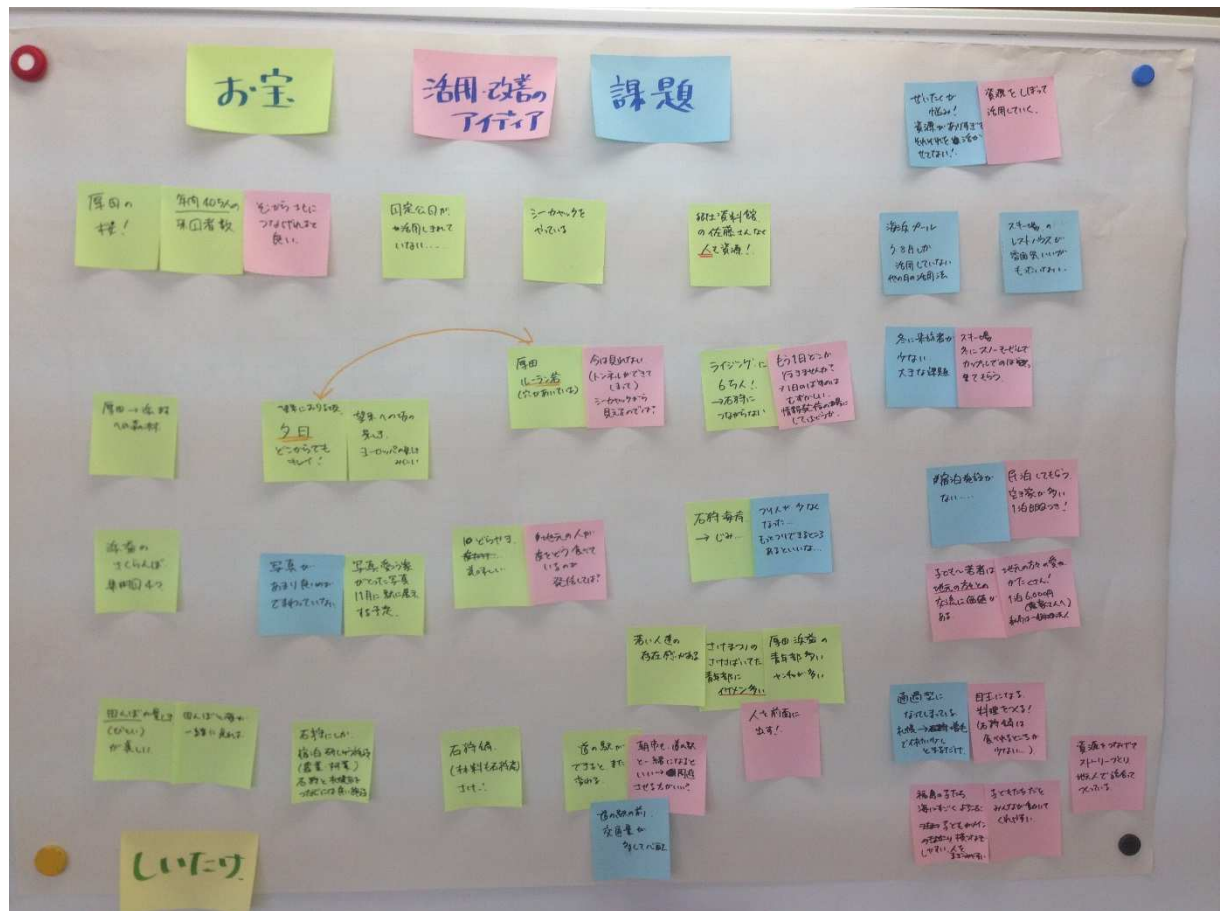
○遊休施設を活用

- ・観光ツアーとして、手ぶらでもできるように。
- ・体験型でお金を落としてもらう仕組み。
- ・空き校舎を有効活用。
- ・学校を合宿として利用する。
- ・芸術家の創作活動の場にしてみよう。
- ・石狩には宿泊施設がない。宿泊ができると体験もできる。
- ・市の遊休施設を使って、ゲストハウスなどにサテライトオフィスを。
- ・夏場のみでもゲストハウスなど体験からリピーターをつくる。

○その他

- ・厚田道の駅の使い方
- ・動物を集めるなど。
- ・山・海、朝市。

しいたけグループ



【まちのお宝・地域資源】

○桜

- ・厚田の桜。
- ・年間 405 万人の来園者数。
- ・そこから北につなげられるとよい。

○森林

- ・厚田から浜益への森林。

○さくらんぼ

- ・浜益のさくらんぼ果樹園 4 つ。

○田んぼ

- ・田んぼ（びとい）の景色が美しい。
- ・田んぼと海が一緒に見られる。

【活用・改善のアイデア・課題】

○田んぼ

- ・ 国定公園が活用しきれていない。
- ・ シーカヤックをやっている。
- ・ 郷土資料館の佐藤さんなど、人も資源。

○望来

- ・ 望来に降りる坂は、夕日がどこからでもきれい。
- ・ 望来への坂の景色は、ヨーロッパの景色みたい。
- ・ 厚田ルーラン岩（穴があいている）。
- ・ 今はトンネルができてしまっで見られないが、シーカヤックからは見えるのではないかな。

○ライジングサンロックフェスティバルの活用

- ・ ライジングに 6 万人来ているが、石狩にはつながらない。
- ・ もう 1 日どこか行きませんか？→1 日伸ばすのは難しい。情報発信の場にしてはどうか。

○写真による発信

- ・ 良い写真があまり出回っていない。
- ・ 写真愛好家が撮った写真を 11 月に駅に展示する予定。

○美味しい食の発信

- ・ どらやきがおいしい。
- ・ 地元の人がどのように食べているのか発信してはどうか。

○海や海岸

- ・ 石狩海岸が地味。
- ・ 釣り人が少なくなった。もっと釣りができる場所があるとよい。
- ・ 海浜プールは 7～8 月しか活用していない。他の時期の活用方法。
- ・ 石狩には宿泊研修施設（農業・林業）がない。石狩と札幌をつなぐには良い施設。

○石狩鍋

- ・ 石狩鍋（材料も石狩産）、サケ。

○さけ祭り

- ・ 若い人たちの存在感がある。
- ・ さけまつりの鮭をさばいていた青年部にイケメンが多い。
- ・ 厚田浜益の青年部が多い。やんちゃが多い。
- ・ 人を前面に出す。

○道の駅

- ・ 道の駅ができるとまた変わる。
- ・ 朝市も道の駅と一緒にするとよい。周遊させる方がよい？

- ・道の駅の前の交通量が多くて心配。

○スキー場

- ・スキー場のレストハウスは雰囲気がいいが、もったいない。
- ・冬に来訪者が少ないことが大きな課題。
- ・スキー場を冬にスノーモービルでカップルで登ってもらう。
- ・宿泊施設がない。
- ・民泊してもらう。空き家が多い。1泊BBQ付。

○地域資源の活用の方法

- ・資源がありすぎてそれぞれを活かせていない。贅沢な悩みである。
- ・資源を絞って活用していくことが大事。
- ・通過型になってしまっている。札幌増毛間の休憩に少し滞在するだけ。
- ・目玉になる料理を作る（石狩鍋は食べられるところが少ない）。
- ・福島の子どもたちは海をすごく喜ぶ。子どもがメインで横つなぎしやすい、人を巻き込みやすい。
- ・子どもたちがメインだと、みんなが動いてくれやすい。
- ・資源をつなげたストーリーづくり。地元の人で話し合っつつくっている。



【まちのお宝・地域資源】

○海に見える景観

- ・海岸線
- ・厚田の漁港の風景

○アクティビティ（自然環境）

- ・パークゴルフ場（みなくる）
- ・旧スキー場のスロープ（恋人の聖地）

○人が集まる道の駅

- ・（厚田）道の駅、厚田漁港
- ・（浜益）果樹と魚
- ・チニタ（おしゃれなカフェ・ダイニング）は、森の中にいるような。空間が広い
- ・古さと新しさを共存したものが魅力に感じる
- ・厚田漁港朝市

○海の幸（食の魅力）

- ・厚田漁港、海の幸（鮭、たこ、ほたて）
- ・ぶつぎりマグロ（日本海）
- ・ソフトクリーム（乳製品）
- ・厚田朝市が売っていた燻製
- ・（今日は鮭の水揚げ）目の前で見ることができる漁業
- ・手に入る新鮮な魚介類（朝市）
- ・ドナルド（たこ焼き、ジャンボソフト）

○自然環境（地質など）

- ・厚田漁港奥のめのうのとれる浜と地層の露地（尻苗）
- ・日本海の景色（海・山・街並み）
- ・厚田キャンプ場。隣接した自然散策路
- ・安瀬から毘砂別までの国定公園エリア

○歴史的な場所

- ・歴史
- ・鯨番屋などの建造物が良い
- ・白鳥番屋
- ・浜益温泉

○“人”が資源

- ・外の人が景観を好きになって入って開業している
- ・人形（八田さんの）
- ・芸術家

○地元の人が気付いていない

- ・望来坂の景色が良く映画ロケ地にもできる。
- ・しかし、地元の人には魅力に気づいていないので、清掃などがされていないのもったいない。

【地域資源の活用アイデア】

○厚田は、地域外の人を呼び込む。浜益は、地域の人材を活かす

○エリアとしてつなぐ

- ・厚田（望来）は、地域外の人々が魅力を感じて活動してる人が多い。
- ・浜益は、人口環境も少なく、“地域意識”が強いエリアではないか。
- ・拠点（温泉）を核に資源をつなぐ。
- ・厚田～浜益の連携はむずかしい。
- ・地元の人々が利用しないこともある。

○宿泊できるような場所

- ・浜益温泉の活用
- ・通年でなく、半年と区切って実践してみてもいいのではないか

○オーシャンビュー

- ・すごくいい景色（車からの眺望）。もっと知らせてあげると良い
- ・どのようにPRしていくのか（厚田のお寿司屋）
- ・7つのトンネル名をつなぐ。

○マウンテンビュー

- ・恋人の聖地からのながめ（海、山）を活かす。

○道の駅の冬の活用

- ・雪遊びなどの冬の魅力や観光の商品づくりが課題である。
- ・厚田・浜益は自然を活かした観光が大切ではないか。



【まちのお宝と活用アイデア】

○景観

- ・昔から変わらない風景・ながめ
- ・望来の景色
- ・海のにおい
- ・休憩所があれば良い
- ・別荘地としての開発

○恋人の聖地、坂（旧スキー場）

- ・音楽イベント、大婚活ツアー
- ・繰り返し来てもらう工夫
- ・ファミリー向けのものがあれば再来するのでは？
- ・BBQ。そりすべり→子供と一緒に遊べる

○景観×恋人の聖地、坂

- ・ロケーションフォトウェディング
- ・ロケ地として使ってくれたら良いのでは？
- ・レストハウスの活用
- ・薪ストーブを作って、レストハウスをログハウスとして使う

○食

- ・朝市
- ・どら焼き。あんこ以外で売ると良いのでは？→店長のこだわり
- ・食系イベント
- ・毎年穫れる量が一定ではないので、予想がむずかしい
- ・シーズン毎にグルメがある
- ・なめこ、しいたけ
- ・シーズンごとにグルメツアー
- ・製品をつくる。資源を加工して売れるように

○食×景観

- ・景色と食事を楽しむ、つなげる場
- ・何も持っていなくても楽しめるようにすることが大事

○子ども、若者

- ・子ども向けイベント・行事の実施
- ・学校同士の交換留学（札幌⇄石狩）
- ・サマーキャンプ（現在の「石狩ふるさとキャンプ」）
- ・資源はあるが、それを楽しめる仕組み・施設がない

○恋人の聖地、坂×アクティビティ

- ・共同作業での出会い
- ・薪わりコンテストツアー（実は出会いの場）

→割った薪は売る！（ゲストハウスや住宅）

○アクティビティ

- ・遊びにお金をかける時代
- ・お金がかかるもの、先生がいないと駄目なものも受け入れられる
- ・道の駅と朝市をターザンロープでつなぐ

○冬

- ・冬の集客が課題
- ・サウナ→雪につっこむ
- ・犬ぞりやりたい。石狩の河口辺りで
- ・ワカサギ釣り→外国人も来る

○その他

- ・札幌からの距離感も良い
- ・受け入れとのバランスをしっかりとることが大事
- ・車でしか行けない負のイメージがあるかもしれない
- ・事前予約するなど対応しては？
- ・資源を見に来たついでにお土産買ってもらうくらいが良いかも
- ・黄金山など山の資源
- ・知られていない、つくっているもの、資源など
- ・メディア、PR 戦略